難波京朱雀大路跡（NS09－1次）の発掘調査

2009年9月17日(木)
大阪市教育委員会・財団法人 大阪市文化財協会

■ 難波京朱雀大路跡とは

大阪城の南、谷町四丁目駅を降りたあたりには、かつて難波宮と呼ばれた宮殿が7世紀と8世紀の二回、建設されました。このうち7世紀の前期難波宮は、乙巳の変(大化の改新)の後に孝徳天皇(在位：645～654年)によって造営された「難波長柄豊碕宮」であると考えられています。この前期難波宮は火災などによって廃れますが、聖武天皇(在位：724～749年)によって前期難波宮と同じ場所に再建されます。これが8世紀の後期難波宮です。この難波宮の跡地は国の史跡として大切に保存され、現在、難波宮公園として整備が進められています。

さて、宮殿である難波宮の周辺では、都としての景観にふさわしいよう、碁盤目状の都市計画が進められました。難波宮周辺に広がる都市を、難波京と呼んでいます。この難波京を建設する際の基準線になったと考えられるのが、難波宮の中心からまっすぐ南に延びる道路、すなわち「難波京朱雀大路」です。

今回の発掘調査では、この難波京朱雀大路の痕跡の有無を確かめるとともに、7世紀に建設された四天王寺の東方地域がどのように開発されていったのか、ということに主眼をおいて調査を行っています。

■ 調査でわかってきたこと

発掘調査は7月の下旬から開始し、北と南の2つにわけ、合計1,300平方メートルを調査する予定です。北区の調査はすでに終了し、現在は南区の調査を進めています。

北区の調査では、主として次のことがわかりました。

- □ 古代(7～10世紀)の土器や瓦が見つかったことから、この時期に調査区近くまで開発が及んでいたことが推測できます。
- □ 鎌倉時代の井戸や穴が見つかりました。この時期には、確実に人の暮らしが調査区周辺で営まれています。
- □ レンガの基礎を使用した、大正時代の校舎跡を検出しました。市立大阪甲種商業学校時代(明治45年～大正7年／1912～1918年)、あるいはこれを増築した大阪市立天王寺商業学校時代(大正10年～昭和22年／1921～1947年)のものと考えられます。

遺跡の名前にもなっている難波京朱雀大路の痕跡は残念ながら見つかっていませんが、これらは現在の天王寺商業高校にまでつながる、この場所の大切な歴史です。南区の調査でも、より多くの歴史が明らかになることが期待されます。

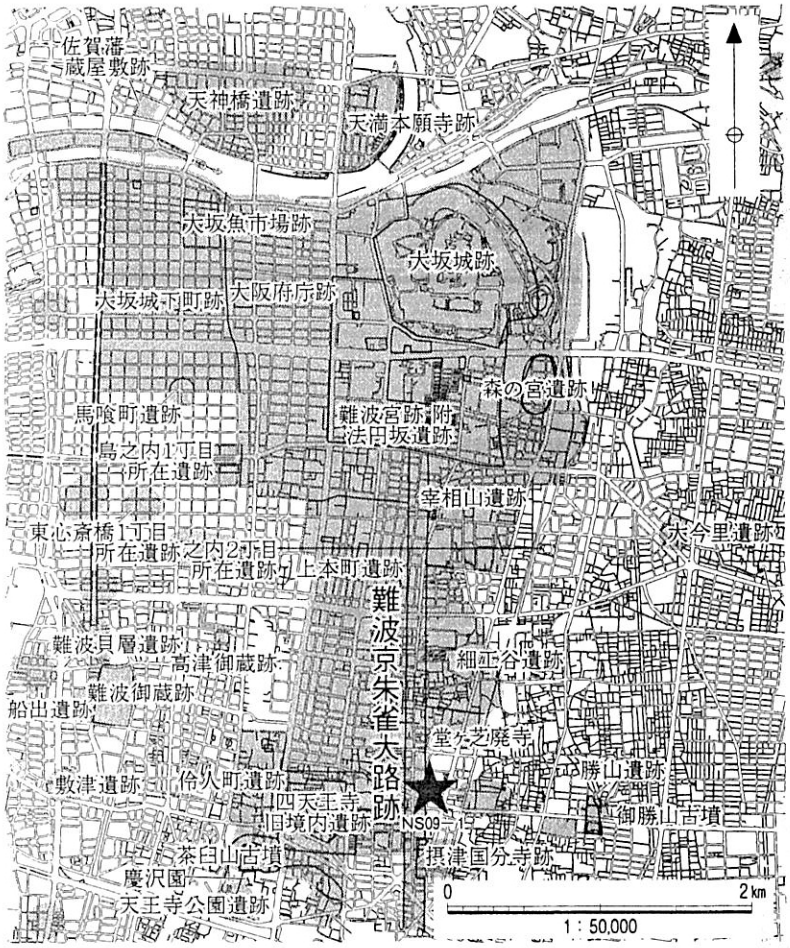

図1　今回の調査地と周辺の遺跡

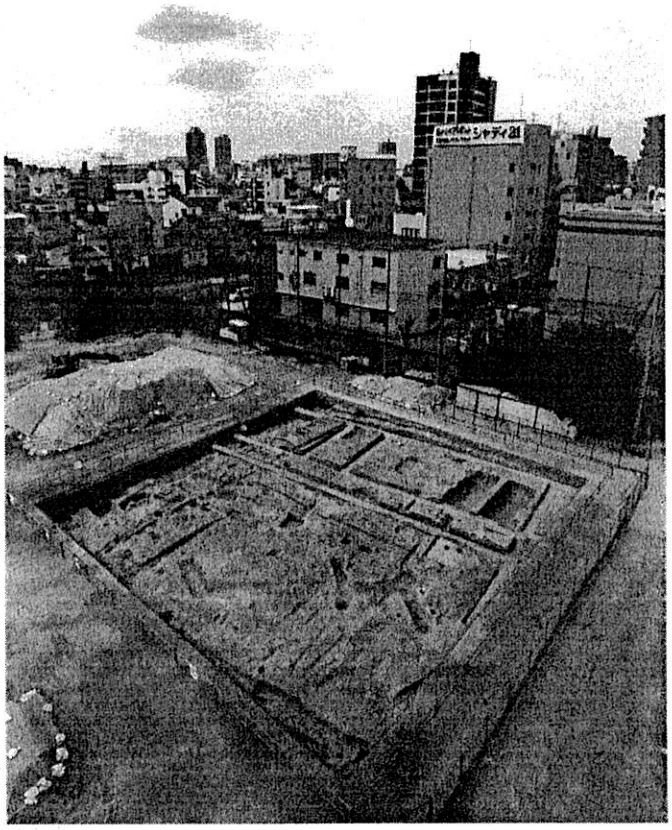

写真1　北区の調査(北東から撮影)

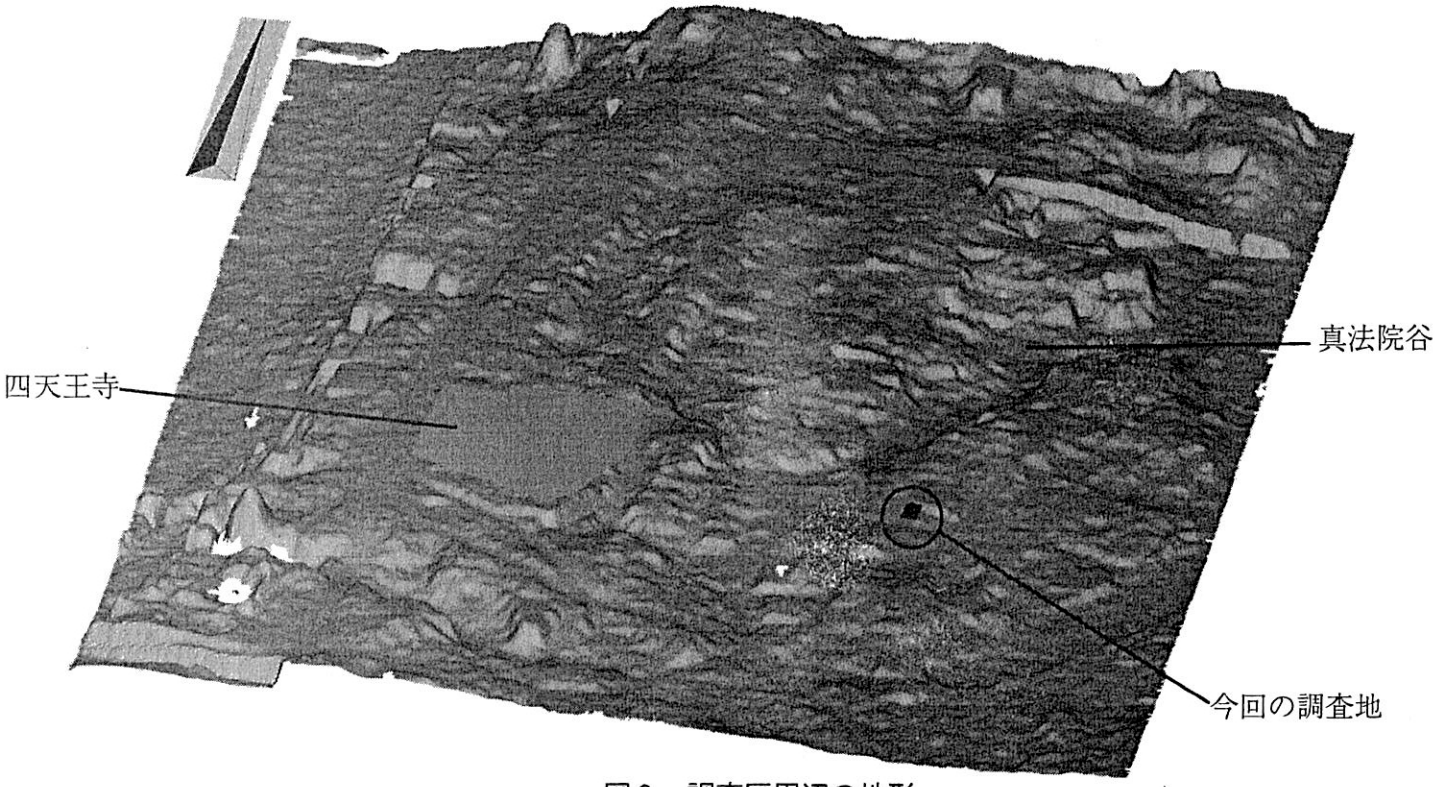

図2　調査区周辺の地形